

## 《研修報告》異常気象と防災に関するシンポジウム

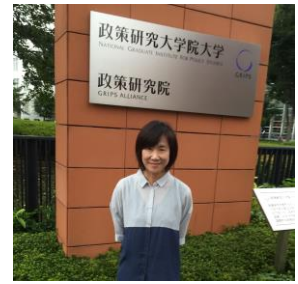
会場 政策研究大学院大学 想海棲ホール

日時 平成 28 年 9 月 12 日(月) 13 時 15～17 時

主催 政策研究大学院大学 防災・危機管理コース

[研修目的]

●近年、異常気象が発生し、多くの災害を引き起こしている。異常気象に対応し、住民を守り、地域の安全を確保するため、気象情報等の活用・防災対策の充実強化の重要性が増大している。官民にわたる気象の第一線で活躍している専門家、地域の危機管理・防災業務に携わる実務家、研究者の方々から、最新の情報、対策等を聞く事で、防災・危機管理に関する政策研究に活かす。

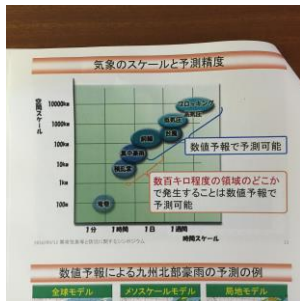


### 基調講演 13:20～14:30

「近年の異常気象、地震等について」 西出則武氏（前気象庁長官）

～気象は防災そのものである～

平成 16 年からの 10 年間だけでも台風の甚大な被害がある。局所的豪雨、土砂災害も洪水も垂直避難（2 階に逃げる）で助かるとは限らない。地球温暖化の影響から日本のどこの地域も、短時間強雨は増加傾向が明らかである。



先になるほど、計算の誤差が出るので予測は不確実、小さな現象ほど予測は困難となる。

地域の危険については、その地域の災害の歴史を忘れてはならない。

震度を 3 分程で発表しているが、短時間で震度を出す技術はない。基準を高くすると回数が少なくなり見逃すことがあるかもしれない。また、基準を低くすると回数は増えるが空振りが多くなることが考えられるという気象のジレンマがある。

大雨、噴火、津波、重大な災害情報発生への警戒が住民や自治体に十分伝わらない、迅速な避難行動に結びつかない例から創設したが、特別警報を待ってから逃げたのでは遅い。

新たなステージと捉え、的確な発令への支援、可能性がたかくなくても積極的に伝えていく。危険度、切迫度がわかりやすい情報提供を。(交通政策審議会気象分科会の提言)

### 事例発表 14:30～15:30

「地域における取組みと課題について」

発表者 和歌哲也氏（和歌山県危機管理監）

「和歌山県における 防災・減災対策への取組と課題」

平成 23 年台風 2 3 号の甚大な被害から、危機管理の基本的な考え方を整理

「人命救助→早期復旧」「スピード」「人・モノあらゆる資源を総動員」

「地震・津波から絶対に命だけは助けるぞ!」とにかく逃げる 津波から逃げ切る支援対策プログラムを作成。ハード整備することで、避難困難地域の解消（逃げる時間の確保）

・東日本大震災の教訓

避難先の安全レベル設定 避難路の整備 避難カード ところてん方式備蓄  
避難所運営マニュアルモデルと運営リーダー養成 住宅の耐震化  
情報伝達の多重化（防災わかやまメール エリアメール 避難先ナビアプリ yahoo サービス避難先 進防災情報システム Lアラート FM ）

「11月5日は津波防災の日(国連)」は安政南海地震の稲むらの火（濱口梧陵）が起源

**発表者** 原田吉雄氏（熊本市総務局危機管理防総室首席審議員）

熊本地震は、前震と本震大分まで広がった異例の事態（200回以上の揺れ）

熊本城の修復はおよそ600億円。連日マスコミ タクシーと宿を抑えてしまって救援が入れない事態だった。水害対応はしていたが地震の想定はなかった。圧倒的なマンパワー不足。震災ゴミの問題も大きい。災害対策本日会議はこれまで62回。会議室を2Fと3Fに分けてつくったのは失敗だった。

震災以降、気象庁から警戒基準見直しの通達があり洪水と法基準水位を引き上げた。ウエザーニュースとも契約。弱者をバスで移動、お知らせチラシの工夫している。梅雨、そして今は台風に備えている。

## パネルディスカッション 15:40~17:00

「異常気象等に対応する防災のあり方について」

**パネリスト** 西出則武氏（前気象庁長官）

和歌哲也氏（和歌山県危機管理監）

原田吉雄氏（熊本市総務局危機管理防総室首席審議員）

田村圭子氏（新潟大学危機管理教室教授）

鈴木靖氏（日本気象協会技師長）



**コーディネーター**

武田文男氏（政策研究大学院大学教授、防災・危機管理コースディレクター）

地球温暖化の影響による異常気象は年々の変化も大きい。

海水温の上昇による台風の進路と強雨、北海道は梅雨がなかったが雨の振り方が変わった。過去の安定した地面が強雨で崩れることも懸念される。

熊本の震災は進行形。毎日1~2回発生している 備蓄はまったく足りていない。異例づくめ前震、本震、大分まで広がった。202回の余震、18万人声の避難 長引く災害。全体としてどうやって復興していくのか先が見えない。

津波防災の日は復旧復興のシンボル。日本が世界をリードする対策をたてることが期待されている。キャラクターに和歌山きーちゃんとかくまもん参加。

過去の経験を生かしてより十分な対策（昔からの経験で安全地帯に集落をつくってきた先人の知恵 古い神社の一角が残っている 古い村落 寺田寅彦）

タイムラインを前倒しで、自助共助もいっしょにつくる

本部が被災したときの備え、迂回路の整備と準備、二次避難所までの送迎の手だてを考  
えておく必要がある。

明るいうちにだせる情報はだしておくことで、弱者のフォローができる。

都合の悪い情報が通り抜ける人の心理がある。安心と受け取れる情報は切り捨てる。

#### [研修所見]

地球温暖化の影響から海水温の上昇、台風や竜巻の発生もこれまでの予測が通用しない。  
短時間強雨は増加傾向が明らかであり、年々の変化も大きい。

先になるほど、また、小さな現象ほど予測は不確実になるが、致命的被害を防ぐには不  
確実な時点で動く必要もある。

災害対応のタイムラインは、気象台と市町村と住民の連携による的確な防災対応をつく  
る上でも前倒しで進めるべきであろう。

また、長い歴史の中で災害に学び、住み続けてきた場所は無事な場合が多い。住民自ら  
が、住んでいる周囲の危険箇所、避難所、避難経路を知っておくためにもハザードマップ  
の周知は重要である。

防災は、まず気象を知ることから。新たなステージに対応した防災・減災のあり方を検  
討する必要があると思われる。